

---

# 厨二病患者の基地外的思想

破壊神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

厨二病患者の基地外的思想

### 【Nコード】

N0713Z

### 【作者名】

破壊神

### 【あらすじ】

主人公「バンドの練習をしに行つて帰りがてらに遊ぼうとしてたら、よう、よにスケープゴートまがいな事をされちゃいました。そして、神に見殺しにされますた。」

元の世界の神「いや、まじスマン。本当にすまんわ。テへペロ」

この作品は、このサイトで初投稿となるいわゆる処女作です。  
初心者による作品ですが、楽しんでいただければ光栄です。

ちなみに、この作品はエブリスタ様にて投稿した作品の改訂版です。

この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などは一切関係ありません。

## 裏・プロローグ1（前書き）

始めましてwwwwww破壊神です！

誤字とかありましたので、編集し所々内容を変えてみました。

それでは、お読み下さい！

どうぞ！

## 裏・プロローグ1

現代、というか、地球上には存在しないような、例えば、別の世界と比喻していいような、全てが白や黒が入り乱れる空間、いわゆる灰色の空間の中に一人の青年が立っていた。

そこで、青年は語り始める。

俺は死んだらしい。

突然、こんなことを言うのは可笑しいだろうが、もう一度言う…俺は…死んだらしい……。

なぜ、このような事になったのかは、時を遡る事になるが、聞いてくれ。

（回想）

体感時間で数時間前

その日、俺が組んでいるバンドの練習をし、練習が終わった時の事であった。

練習をしているライブハウスは、自分の自宅から自転車、電車の移動手段を用いて、約1時間10分もかかる。

自宅は山に囲まれた田舎にあるため、地元にはライブハウスなどない。

いま、俺が居るような県庁所在地があるような都市部に行かないとない。

そのため、電車代などもバカにならないため、せつかくだから、遊ぼう。という流れになった。

建前は置いていて、俺自信、バンドメンバーもぶっちゃけるとただ、遊びたかっただけなんだが…

そんなこんなで、俺達はCDショップで好きなバンドのCDを見たり、アニメイトでお気に入りの今期アニメのグッズなどを購入したり、と今の時間を楽しんでいた。

しかし、運命と言うのは時に残酷なものだ。

バンドメンバーと共に夕食の為に、比較的安価で食事の出来るファミレスに向かう為、徒歩にて移動の最中だった。

その時間帯は、社会人の帰宅ラッシュの為か、道路は渋滞をしていた。

それを歩道から、メンバー達と会話をしながら、眺めていた。

歩道者側の信号が青になった為、横断歩道を渡っている途中、一般車両がこちらに猛スピードで向かって来たのだ。

始めは、その普通車との距離は約200メートルぐらい離れていたため、あまり気にしなかった。

しかし、お互いの距離が50メートルぐらいに差し掛かると、流石に違和感を感じた。

その時、普通車に目を向けると周囲の建物の光で照らされていたので、運転手の顔が見えた。

良くみると、居眠り運転をしていたようだった。

これはマズイと思いつたら、俺達と同じく横断歩道を渡っていた人々の中の一人が、「早く渡れっ！」と叫んだ。

周りの人々は歩道へ向かって走りだす中、幼い少女。文字通り、幼女が一人横断歩道へ取り残されていた。

普通車は、横断歩道の目の前まで迫っていた。

俺は、その幼女へ哀れむ目を向けていた。

こんな若い少女が命の危険にさらされているのか、それに、普通車の出すスピードを見てみると、助かりはしないだろう。

と、思った。

そんな事を考えていたら、自分の体が突然動いていた。

(あるえー？　なんで横断歩道に近づいてるの？)

自分自信の思考とは別の“なにか”に操られてる感覚だ。なんといつか、現実味のない感覚が俺を襲った。

「おい！君！！なにをやってるっ!?!」

「なにをやってるんだよっ！お前っ?!危ないぞっ!」

周りの人々やバンドメンバーからの声だろう。

絶えず、周りの人々の声があるが、思考がボンヤリとしながら、それでも横断歩道に残された少女の元へ行く。

普通車との距離が10メートルに差し掛かった頃、俺は少女の目の前に着いた。

今だに、ボンヤリとしながら少女の表情を見ると、笑っていた。ただ、正確には顔の作りなどはわからない。

普通、というか、だいたいの人はこの状態を怖がるだろ？しかし、少女は、そのななだいたいの人に当て嵌まらないみたいだった。というより、顔の表情は分かってる

って、なぜに、正確に顔がわからないんだよ！  
そして、少女に近づくと俺は少女を突き飛ばし、そんな俺を嘲笑うように、一般車両である普通車は突っ込んできた。  
少女の変わりに普通車に轢かれたようだった。

轢かれた時、上空へ跳んだ。そんな中でも少女から目を離さなかった。

否、離せなかったのだ。

そんな中、今だ、笑みを絶やさぬ少女…。

(これは、怖いけどシユールな光景だなあ。)  
と考えながら、俺が、俺達が見ていた‘夢’がここで終わるのだから。と思った。

ドンッ！

頭から地面に着地したようだ。

尋常ではない痛みが俺を襲う。痛みを襲われながら、自分の家族、夢への思い、二次元に住まう我が嫁や子、孫達、そして、自分が助けた少女の事を考えた。

そんな中、周りの人々の声がする。

「だ、大丈夫かっ？」

「誰かっ！救急車を呼べっ！」

「おい、おい！しっかりしろよっ！」



うん、なに言ってるかは雰囲気でわかるが、言葉を認識できない。簡単に言くと雰囲気とかでなにいつてるかわかるが、断片的にとぎれとぎれに聞こえるんだよ。俺、死ぬな…。と思った。

そんな中少女が近づいてきた。少女は口にした。

「さあ、始まるよ。貴方の物語が。」

「えっ？」

「また、逢おうね。」

そこで、意識が途切れた。

以上が、俺が死んだ理由だ。

長すぎてしまったが許して下さい。

ところで、ここはどこだろう？

裏・プロローグ1（後書き）

うひょー

やっ  
ち  
ま  
っ  
た

## 裏・プロローグ 2 (前書き)

どうしてこうなった…

## 裏・プロローグ 2

どうしていいか途方に暮れていると、どこからか老人特有の声があった。

「なにをシラけた顔をしているのかね？青年よ。」

「ん!？」

突然の事だから驚いた。

声の主に目を向けると、ハリリーなポッターよろしくの魔法学校校長みたいな老人がいた。

しかも、俺の身長（170cmあります）より高く浮いてるし……

あまりに、非現実的だが自分の死を理解してしまった為、一瞬の自暴自棄のように、もうどうにでもなれ。といった考えになっている。

「ほうほう、驚かしてすまないね。何分、はじめて下界からの客人な為に調子に乗ってしまったようじゃ。」

好々爺よろしくの笑顔を向けてきた。

コイツ……やりおる……ゴクリツ 意味不

とりあえず、笑ってごまかさないで、謝罪しろや、ああん？

「すまんのう、それと先程から態度が変わっておるぞ」

おれ、喋ってないんだが……

「ああ、読心術というものがあつてのうっ。」

老人よ…何者だし…

「ワシ？ワシは、いわゆる神かのう」

えっ？…

「なんじゃい！？その白い目は…」「いやあ、さ、うん…

「信じはしないか…」

はい

「即答かのう（泣）…」

宙に浮いた神（核爆）様が泣いている……

この短時間ですごい体験をしたなあ…俺…しかも、神（核爆）様が泣いてるんだぞ？

カオスだっ……………

閉話休題

「ゴホンッ…それでは、本題に入ろう。君が“なぜ”ここに導かれたかを…」「導かれただ…と？」

「うむ、君は、君がいた世界とは別の、ある世界の“意思”、君が死ぬ直前に見た少女がいたじゃろ？」

はい、顔は覚えてませんが、なんとなくか、違和感がありました。

「そうじゃ、顔というか、少女と認識出来るが、ああいう存在は、存在自体が大きい為か認識が正確には出来ないのじゃ」

言われてみれば……幼い少女だと認識はしたが、顔の作りまでは、認識出来なかった。

ただ、表情で笑ってるのはわかりました。

「なんじゃと？表情…そこまで認識出来るとは……」

どうしました？

「いや、のう、通常は認識出来るだけでも凄いなじゃが、表情まで認識出来るとは…君が“なぜ”あの“世界の意思”に導かれたか合点がいったよ。」合点というと？

「すまんのう、いくら神でも自分の管轄外の世界の存在には介入出来ないのだよ。」

ということは…って、神は複数いるんですかい！

「うむ、数多の世界がある故に、大体は世界一つに神が一人就くじやが、まあ、例外はいるが…」

はじめてききましたよ…

「まあ、君達の世界の人間にはわかるまえ、まあ、簡単な話、君の住んでいた国で八百万と言う言葉があるじゃろ？簡単な話はそういうことじゃ」

な、なるほど… いまいち理解していない

「ちなみに、君は‘導かれた’と言ったが、ワシはそこまで介入出来ない…」

そこまで、というと少なからずは介入出来るんですか？

「うむ、まあ、加護を与えるくらいしか…。まあ、この場所は元いた世界と君を導こうとしている世界との境界線…言い方は悪いが、君は死に、魂が‘向こうの世界’に所有権が移ってしまった…すまんのう」

神は今だ、宙に浮きながらやるせない顔をしている。

いえ、気にしないでください。神様（尊敬したので普通によびます）がそこまでおっしゃってくれるのです。それだけで、うれしいです。

「そういつてくれると助かるわい。わしらの都合ですまないんじゃないが、上の命令でう。事前にこのような事になるのはわかっていたが、ワシの権限では介入は無理なのじゃ…本当にすまぬ…」

いえ、本当に大丈夫ですから、ただ、向こうの世界はどういう場所なのかを聞きたいです。あと、これからどうなるかも…

「ああ、把握しているのは、先程言った数多の世界の一つであること、その世界は、魔法の世界…。いわゆるファンタジーの世界じゃ」

ファンタジー…ゴクリッ

「ちなみに、血生臭い世界でう。文明は君の元いた世界、すなわちワシが管轄としている世界より科学の進歩などを考えると中世ヨーロッパのような場所じゃ」

なにそれ…死亡フラグの匂いがプンプンと…

「長々と話てすまないが、もうそろそろ、君の魂は、向こうへ渡る。幸運を祈る。あと、少ないがワシからのプレゼントじゃ、神であるワシの加護を与えよう。ただ、そこまで凄い能力ではないが…ワシの出来る限りの力を与える。」

なにからなにまですみません。感謝します。

「いいのじゃ、元々、ワシが管轄する世界の住民じゃ、少しぐらい鼻厘したって大丈夫じゃろう。しかし、君は冷静なのじゃな。」

まあ、死んだ事により自暴自棄というか、開き直ってるようなものです。なんというか、今の自分の現状が実感しないというか…。

「なるほどのう（強いと思っていたが、やはり、不安か…。一瞬の自分に暗示をかけての現実逃避をしておる…）むっ、そろそろ時間か…それでは、加護を与えよう。」



神は青年になんか、光を浴びせたっ！　ここ重要。

ちよｗｗｗｗホ○ミかよｗｗｗｗ（某龍の冒険の魔法に似ていた）

「よし、これで大丈夫じゃ、向こうに言っても元気でのう」

スルーかよ…。ええ、いろいろとありがとございました。

「なに、気にするでない。もう、君の存在は向こうへ渡っている。君の友人や家族達は任せよ。アフターケアはしとくからのう」

あ、なにからなにまでありがとございます。（そういえば、家族か…）

「なに、お安いご用じゃ。（ふむ、自分で精一杯だった為、生前の係わりなどに関しては頭から抜けていたか…難儀なものよ）」

そうして、青年の体は徐々に光の粒子となり始めた。

「もう、時間か…」

これはっ…

「いま、君は境界線を渡っているのじゃ」

なるほど…

「最後に言い残すことはないかのう？」

ええ……ありますのとも……言わせてください……童貞で死ぬのは辛い  
です……しかも、異世界へ拉致です……（泣）

「う、うう……やめい……涙が出てきたのじゃ……仕方ない……向こうでフ  
ラグが出来やすい建設士にしてやるう」

あ、ありがとう……（号泣）

「うむ、頑張るのじゃぞ……」

は、はい、本当にありがとうございます……（涙目）

そして、俺の体は完全に粒子となり消えた。

「難儀なものじゃ……口調といい態度といい、やはり、不安だったの  
か……」

老人はその場で思い詰めた顔をしながら、そう呟いた。

## 裏・プロローグ 2 (後書き)

いや、まさかの……

や、やめてください！反省はしてるんです！

と言うわけで、主人公が精神が不安な為、口調、態度が所々変わらせてみましたが、どうでしたか？

よかったら、感想をお願いしますm(´▽` )m

## ブログ 1 (前書き)

更新遅くなってすみません。

先日まで、修学旅行に行っておりました故。

ちなみに、沖縄に行ってきました。

## プロローグ 1

やあ、俺だよ俺！そうそう、親戚の拓也だよっ！さっき事故っちゃってさ、三日以内で100万用意してくれない？えっ？受け取り方法？ああ、××××××××××って口座に頼むY（ry

しばらくお待ちください。

はっ！夢か…

つい、俺的な詐欺をしている夢を見ちまったぜっ！

とりあえず、さ

神様の所から粒子になって消えた後に、意識飛んじやったんだよね

w

もう、ビックリするほどユートピア的なw

あ、あれは除霊方法か

それでさ、意識が戻ったのはいいんだが…またしても…ここどこよ？

そう…俺が居るのはなにを隠そう…目が開きません（泣）

それと、液体の中に居るような…まるでプールや川、海に沈んでるような感覚です。はい。

あと、体の姿勢というか体やへソに違和感が…体は思うように動かないし、へソにはなにかが付いてるような……

それに、なんとというか…いまの状況が懐かしいというか…以前、それも俺が前世で体験した…安心感に包まれて、安息出来るような場所…。

そして、“いまだ自分自身の存在が不安定と感じる”。

このなんとももどかしいような感覚…。

まあ、考えるのはいいが、呼吸が出来ないのによく生きてるよな…俺…。

ああ、呼吸出来ないのは文字通りの意味だ。  
液体の中に居るからね。

それにしてもさ、俺死んだんだよな…。

さっきの神の口ぶりでは、俺は殺されたようなもんだ…。そう考えると自分自身から黒い感情を抱いてくるが、いまの現状と状況の把握が出来ない…。

さっきまで、というか、いまま現在進行で混乱している自覚がある。どうすればいい？

冷静になろうとするが、現実離れをした出来事や現状、先行きの見えない事に対しての不安、いくつあげてもきりが無い不安要素に対して頭を痛める。

また、元の世界の神が言っていた言葉や死ぬ前の出来事で気になる点があるから整理しよう。

まず一つ目は、確定しているのはこの世界は、元の世界ではないこと。

二つ目、この世界の文明レベルは簡単に言う地球での中世ヨーロッパに似ていること。

三つ目、死ぬ前に、こちらの世界の根源と呼べる存在が口にしていたが、その存在との邂逅が決定事項と見ていいと予想される。

四つ目、仮に文明や全ての事が中世ヨーロッパと同じだとすると、王族や貴族、宗教関係に属する特殊な階級もありそうだし、一般的な生活水準や戦争、価値観なども視野に入れたりすると様々な問題がある。

いま、思いつくのはこのぐらいだ。

焦っても仕方ないし、体の自由も利かない、やれる事と言ったら、今の現状やこれらからの事を予想し、覚悟を決めよう。

そうして、自分自身を落ち着かせながら思考に入るのだった。

どのぐらい時間が経っただろうか？

自分の中で現実を受け止め、予想される出来事に対して覚悟を決め終えたが、何分、時計がないため時間が把握出来ない。

意識が戻ってから、数分しか経ってないかもしれないし、数時間か

もしれない、もしかしたら数日、数週間、数ヶ月、数年経ってるかもしれない。

まあ、時間の流れを掴めないからなんとも言えないが…。  
そんな事を考えると異変を感じた。

体は自分の意思では本当に少ししか動かないが、そういう意味とは別の意味で、体が動いている。

そんな中、自分の感情の中に喜びというものが出てきた。  
すこし驚きながらも、体の動きに身を流したのだった。



## プロローグ 1 (後書き)

うっ……文章って難しい。

## 第1話（前書き）

皆さん久しぶりですw

そしてメリークリスマス！

今回は

主人公がついに…

なんだよ、この二人

表も裏も含めて…ね

の三本ですw

## 第1話

体が流されるように動き、何かに締め付けられる感覚をしながら後頭部に空気が触れる。どうやら、“外”に出たようだ。そんな中、不意に悲しみと喜びといった感情に襲われなくなってしまった。

完全に外へ出ると、目は閉じられたままだが、光を感じるし、人の会話も聞こえる。すると、誰かに抱えられているような感覚、昔、それも前世でも体験した覚えが…

そんな事を考えると、感情が溢れ出してしまった。それは口からも出てしまい、感情の赴くままに任せてみた。

「オギヤー！オギヤー！」  
と、言う声。

赤ん坊の声じゃん？

それから、赤ん坊の誕生への喜びの声、赤ん坊をあやすような声など。

……………。

現状を……。真実を、というか現実を受け止めたくはないが、俺がその赤ん坊’みたいですよ……。なぜ、そうなるかって？そりゃ、臍へそにある違和感がなくなり、ちよつと痛みを感じるし、耳元であやすような声が聞こえるし、抱かれてるような感覚があるしさ……。

まあ、‘言葉の意味’というか、前世で聞いた言葉である。日本語、英語などの外国語にも当て嵌まらない言葉な為である。

わかりにくいと思うが、メディアや学校での教育で教えられたり、

紹介される言葉とは一致しない。前世での言葉は、だいたいの言葉はなにかしらの共通点があるが、いま、聞こえる言葉は初耳である。まあ、ただ前世で存在する言葉を正確に覚えていないし、全部が全部、学んでもないから断言できないが、まあ、初めて聞く言葉だから、‘理解’できていないのだ。

それに、いくら‘覚悟’を決めようが、未体験で予想外な体験なのだ。

冷静に対処は出来ないし、いくら冷静になろうが、情報などが不足である。

パニックになるな。という方がおかしいだろう。

いまだ、自分自信に起こっている出来事に啞然としていて、突如、睡魔に襲われた。

まあ、赤子の体、しかも、生まれたばかりなのだ。仕方ないと言えば仕方のない事だろう。

そして、俺は睡魔に身を任せて眠りについた。

あれからどのくらいの時間が経ったのだろうか？

眠りから覚めた思考で考えていた。

とにかく、眠りについてすぐに目が覚めた訳ではないだろう。

少なくとも数時間ぐらいかな？実際、出産直後の赤ん坊についての知識がないし、出産（生まれる側で）前世でも体験したことだが、何分記憶にないからなんともいえない。

しかし、赤ん坊の時の記憶のある人も実在するから不思議。これも神秘か……。となったが、いまは関係ないので、この話は置いときます。

いま、俺は横になっている。横になってるといつても、出産直後の幼児だから体が思うように動かないし、体が発達してないからしゃあないんだがね。

まあ、そんでさ、体をポンポンとやられてる訳ですよ。テレビとかいろいろな情報を閲覧できる物でさ、出産が終わって少しの時病院の病室で母親が自分の子供をあやすような描写があるでしょ？まあ、そんな感じでやられてる訳なんですわ。

それにしてもさ、段々目が開いてきて景色が視界に入るんだが、部屋とかはまんま中世ヨーロッパで王族や貴族とかが使う部屋みたいなデザインだし、そして、俺に微笑むように見る二人の男女が目に映ります。はい。

あらやだ。恥ずかしいじゃない／＼／

.....。

うん.....。

なに言わせんじゃ（#。。（ゴラアアアアアアアアッ！

って、誰に言ってるんだろ？俺。

## 閉話休題

すまねえ！なにかが我輩にあつたようだわっ！

まあ、そんな事よりさ、その男女のスペックが廃スペックなんですよ。わ。

ちなみに、廃スペックとはその名の通り、男性の方は外見は20代前半くらい？で、ヨーロッパ系の人種のようにです。しかも、金髪でイケメンです。もうね？モテナイズの総帥である我輩が嫉妬して「イケメン氏ねえええええええええっ！」ってなっちゃうくらい。とにかく、なかなか：というか、すごくカッコイイです。はい。なんなの？金髪赤眼でイケメンで優しそうな顔って？

そして、女性の方も負けずにヤヴァイです。なにがヤバいって、こちらは金髪で碧色の眼をしています。おしとやかそうに見えて、強気そうな顔つきなんだけど、その内に優しさが見える。意味がわからない事を口に出しちゃったが、表現がし辛いです。そして、10代前半に見えるのが不思議。なんというか、ええ、僕のストライクゾーンにも入ってしまう美少女なんです。ありがとうございます！胸も口りった容姿なんで小さ：ゲフンゲフン 控えめです。本当にありがとうございます！

そんな事を考えていると男性が口にした。

「おっ、目が開いたようだね」

「ええ、貴方に似て瞳の色は赤眼のようね」

「あと、君の髪の色にも似て金髪が色鮮やかだよ」

という会話が聞こえる。

とりあえず、赤ん坊って髪あんの？って疑問が先に出てしまった俺は悪くないよね？ね？

あと、廃スペックについてはツッコミはあかんぜよっ！

赤ん坊だけど、お兄さんとの約束だよっ！\*。：\*ミ

男女、というか多分、この世界での両親だと思われる二人を尻目にそう考えていた。

「なんとかいうか、あんまり実感が湧かないけど、この子が僕たちの子なんだね」

「そうね…。私はこの子を産んだから、結構自覚があるけど、初めての事だから、実感が湧かないってのはわからない話ではないけどね。でも、この子は私達の子よ」

両親であつてるみたいだが、なにやら実感とか不吉な話が……。やめるよ？悲しくなるだろ？

そして、ハツとなる父親が慌てて「違っんだっ！確かに、この子は僕たちの子でっ！」

「フフッ、冗談よ。言ってる事は分かるわ」

「もう、いじわるだなあ」

そんな微笑ましい会話の中、俺の考えは杞憂だとわかった。

なんにしても、この二人が俺の両親、前世にも両親が居たため、実感がわかないのは俺も同じだ。まさか、親子揃って同じだなんてなあ。

なにせよこれから生きていくんだし、順序を踏んでこの世界に馴染んで行こう。表も裏を含めて…ね。



第1話(後書き)

うおおおおおおおっ!!!

やっちまった

厨だな俺…。

## 第2話（前書き）

皆さん

あけましておめでとつございます！

いやはや、新年から投稿ですよw

自分、暇人だからしょうがないかw

それでは、本編へ！

## 第2話

あれから一週間が経った。

ある程度時間を置いていたら気がついた事がある。それは、最初に言葉を理解出来なかったのに、いまでは理解出来るようになってるのである。のである。

いろいろと疑問に思う点があるのだが、まあ、別世界だし。

いわゆる、日本の常識が世界の常識と限らない。

と言うように、そんなもんだらう。と、無理矢理納得している。

言葉については、前の世界の神がなんかしてくれるって言ってたから、それが原因なんだろう。と思う。

話が変わるが、この世界での俺の名前が判明しました。

俺をあやしたり、面倒を見てもらってる時に、「バルクライド」とか「バル」と呼ばれました。

ちなみに、性別は男だったからうれしいです。

名前はフルネームで、『バルクライド・サイクランダ・ギ・サンドラ』  
『

』  
といます。

名前長いし、元が日本人である俺には違和感が…。

ちなみに、サンドラ家は貴族らしいです。

両親と使用人の会話を聞いていたら、なんでも『アルシユ王国』という国の公爵という。

なんさね？大公爵の位がなけりや、自質、貴族のトップの位だぞ？

ちなみに、貴族の爵位には序列があり、国にもよるが、日本では基本は上から

公爵

侯爵

伯爵

子爵

男爵

となる。ほかに、公爵の上の大公や男爵の下に位置する準男爵を始めとしたナイトの爵位。

貴族については、国よってややこしいから、詳しくはわからんが、俺の知識があつてれば、上位の貴族である。

ちなみに、大公や公爵は王以外での王族の爵位に使用されるのが多い為、もしかしたら、王族にゆかりのある家かも知れない。

そう考えると、継承権は低いだろうが保有している為、ごたごたに巻き込まれる可能性がある。

あれ？ヤバくね？

まあ、確定してはいないが可能性があるから、すごく恐ろしい。

いまは、ベビーベットに横になりながら考えていると、母親である

『サリーヌ』が顔を覗いてきた。  
おい、そんなに見つめるなよ。

「ああ、バルちゃんが可愛いくて仕方がないわっ！」「シユデイド」  
はお仕事中で来れないから残念そうにしてたわ。いまなら、バルち  
やんを独り占めねっ！」と、言いながら抱き抱えてきた。

どうやら、両親は俺を愛してくれてるようだ。  
なんというか、恥ずかしい。

俺は赤ん坊だけど、中身は精神年齢10代後半だし、まだまだガキ  
だが、勘弁して欲しいが、その反面めちゃくちゃうれしい。と感じ  
る俺がいる。

やはり、いくら精神年齢が10代後半でも感情などは体に引っ張ら  
れてるみたい。そしてママンは俺を抱き抱えながら部屋から出た。  
部屋から出る途中、関節など発達してないためそこまで、身体を動  
かせる訳出はないが周りを見ると、メイド？姿の女性が部屋の  
出入口に控えて居た。

やっぱり、貴族なのかー。と、納得した。

ママんに連れられて（正確には抱き抱えられながらだが）外に出る  
と、造園に向かった。なんというか、良く書物や映像とかにあるよ  
うに、造園が庭に作られているようだ。

ママンは花を摘むと俺に見せてきて「この花、お母さんのお気に入り  
なの」と言ってきた。

いやいや、生後一週間の赤ん坊に言っても普通、理解しないからね？  
まあ、俺は普通じゃないけどさ…

うむ、このママンは天然なのかな？

ぶつちやけ、前世の記憶があるためにどうしても母親と思えないんだよね…。ただ、本能というか、感情とは別に母親と理解しているから、なんとも言えない感覚だよ。

矛盾した考えというか、思考というのか？が拮抗してる感じ？

理解に苦しみますわ。はい。そんな俺をよそにママンはいろいろと語りかけてくるのだった。

この世に生を受けて一ヶ月がたった。

俺は、なんとか自我を失わずに生きている。

なんだかんだ言っても、始めての体験であるし、世界観、というか世界自体が違う世界に来てしまっているため、不安だ。

確かに、異世界に行きたい！と思っていた時期もあったが、内心で

はそんな世界無いだろ。と思ってもいたため、自分の常識、というか考えが否定された事、生前にやり残した事、家族、友達、バンド、その他諸々を考えるとどうしても後悔のようなものを感じてしまう。例えば、「どうしてあの時…」「何故？こうしなかった」などなど、考えてしまう訳です。

まあ、いまになってはどうしようもないんだがね…

まあ、感情と言うものは案外、納得が出来ない場合もある。

また、その逆も然別。

いくら、覚悟や予想をしていたとしても、予想外というイレギュラ  
ーな事が起きれば、やっぱり、乱してしまうものさ。

ただ、人によるだろうがね。

人それぞれ考え方が違うし、今回は世界が違うという面もあるけど、  
地域、国といった所でも考え方は異なったりするし、みんながみん  
な同じ考えの訳ではないだろう。

俺の持論だが、もし同じ考え方をした人間だけなら、面白味の無い  
世界になるだろうし、この考え方の違いとかが調度、バランスが取  
れていいんだろうさ。

すまぬ、完璧に予断だった。

いま、俺はなにをしているかというところをハイハイをして筋トレぽいの  
をしています。

何故？ハイハイかって？

.....。

こまけえこつたあええんだよ。

ただ、気分の問題さw

感情というか、なにかしてれば気が紛れるしwww

まあ、現実逃避みたいなもんさね。そんな俺を数メートル離れた所で使用人が見守っている。

ちなみに、パパンとママンは王城でパーティーがあるため家にはいない。

まあ、息子ほつたらかしてどうかと思うけど、王主催のパーティーだからしゃあないだろうし、貴族で、それも上位の地位を所持しているし、さつき出した考え方の違いとかもあるからしゃあないんだろうけどね。

そろそろ身体が疲れてきた。

ほんの短時間だったが、赤ん坊の身体という訳で体力もない。

実際、生後一ヶ月でハイハイとか異常だろう。

まあ、うちの両親は成熟な子とかで納得してるみたいだし…。

ただ、「お告げの通りだ！」みたいな事を使用人達と騒いで居たから、なんか不安です。

そんな中、使用人の乳母が俺に語りかける。

「ぼっちゃん、そろそろおねむの時間ですよ」

もうそんな時間か、外は漆黒に包まれ、蝋燭に燈された光が室内を照らしている。

俺は思ったより長い時間を過ごしていたらしい。



考えごとってヤバいなあ。

乳母は俺を抱き抱えると乳を与える為に、胸を現し俺に押し付ける。そんな俺は、食事を取る。

ちなみに、乳母には俺より三日遅れて生まれた娘が居て、母乳がでるため乳母に採用されている。

まあ、その他に平民でありながらママンと親しく、信用があったりするの理由の一つだ。

乳母は、まあまあ美人で娘さんは、俺の隣で片方から食事を取っている。

どうやら、俺が夢中に食事をしている為、気がつかなかったみたいだ。

食事が終わると眠くなってきた。

赤ちゃんぼでいーは眠気を訴える。とりあえず、寝ます。

おやすみなさい。

## 第2話（後書き）

今回もカオスだわ。

考え方とかは、やはり、人それぞれ違う考え方がありますので、それについて強調してみましたw  
新キャラのメイドさんや乳母とその娘w

次回も活躍は…あるかな？

というか、今回、活躍した？

.....

それじゃ、また次回！

ばいちっ

### 第3話（前書き）

一日で二話連続投稿ですWWW

後書きにアンケートあり。

### 第3話

皆さん、太陽に照らされた暖かい日にいかがお過ごしでしょうか？  
私が誕生して一年で立って、ちよっとだけ歩けるようになりました。  
とりあえず、オムツ交換や母乳での食事という羞恥プレイから卒業  
です！

いやーさ、もうね？

中身は20歳になるうとしてしているしさ（精神年齢的な意味で）  
もう、困った困った。

しかも、ママン、乳母、メイドさんを含め、美人さん（というか、  
美少女ですな。）が相手だからさw

あの時は、いろんな意味で死にそうになったわ。

ただ、パパンとか、じいじとか、執事とか男にやられてもいろんな  
意味で死にそうになったりするしさ

ぶっちゃけ、誰がやろうとも恥ずかしいかったです…。

これで、トイレとは言わないがオマルを（泣）。

そういや、オマルってあるのかな？

……。

まあ、いいでしょう。

とりあえず、ここ一年で新たに分かった（パパン、ママン、使用人  
の会話を聞いて）事がある。

以前だが、この国…俺が住む国は『アルシュ王国』と聞いていただ  
ろ？

この国は、中世ヨーロッパでお馴染みの「絶対王制」の国である。「絶対王制」とは、簡単に言うと王による独裁で政治を行う国である。

簡単な話が独裁で、正式には違うんだけどね。

ただ、絶対王制だとさ、昔のフランスのように、革命とかありそうだよな？

まあ、愚かな王でなければ大丈夫だろうがさ。

その他にも、この国はガルシュニカ大陸という大陸の南部に位置する国で、海に面して土地も豊かである。

その為、魚介類や山菜、野菜、家畜などが豊富です。何気に、食糧問題では素晴らしい国である。その他にも、鉱物などの資源を有している。国力、軍事力、経済力などはこの大陸でトップクラスである。

やはり、海に面しているのは強みかな？

塩採れるし、ただ、現代のような技術がないだろうから、ただ、本日に塩が取れてるかは知らないっす。

もしかしたら、岩塩かもしれんし…。

あくまで、予想だからわからないけどさ

塩については、もしもの時は精製してみようかな？公爵領は海に面しているし、ただ、山脈が壁になってるけど、隣国にも面しているから、戦争とか起きたらヤバい。

ちなみに、山脈については地理的に異なるが、フランスとスペインのピレーネ山脈を地図で見てもらえばわかると思う。そんな事より、一年たったと言ったが、ええ、お察しの通り、今日が誕生日なんだよw

んで、今日は誕生パーティーを開催するんだってうれしいけど、他

の貴族を招待した大掛かりなものです。

なんでも、この国の大半の貴族は参加するそうだ。

ここでも、なんとなく派閥とかがあるのかな？大半っても、残りの貴族は参加しないし、まあ、用事とかのなにかしたらの理由のある貴族もいるだろうがさ。

自分で資金をだしたり、準備をした訳じゃないから強くは言えないけど

無駄使いだし、多分、資金は領民からの税収だろうし、こんなことをもし、現代の民主主義の国でやったらデモとか反発が起きるだろうなあ

そんなことを考えながら、家（屋敷というか豪邸）の子供部屋でおもちゃや絵本（ママンが読書している時に、「あうあう」って言いながら、ねだつたらくれた）で時間を潰す事にした。

絵本って素晴らしい。言葉はわかるけど、文字がわからないため、ママンやパパン、使用人が読み聞かせをしてくれて、そのあとに、俺だから出来る文字の読み方を暗記して勉強出来るし、まあ、たかが、一歳では意識というか自我がそこまで発達してないから出来ないうらから、俺はやはり異常なんだろうさね。

「ただいまより、サンドラ公爵家、長男であらせられる。バルクラ

イド・サイクランダ・ギ・サンドラ様の誕生パーティーを開催します。それでは、御当主より挨拶があります」

「来賓の方々、私の息子の誕生パーティーに参加していただきありがとうございます。これより、開催するパーティーは無礼講ということで、存分に楽しんで下さい」

使用人の老執事とパパンの開催の合図を区切りに集まった来賓（貴族）の方々は食事をしたり、お酒（この国では、ワインばいのが主流みたい）を飲みながら、それぞれ談笑を開始した。

ただ、大半の貴族は主催側であるパパンやママンに挨拶をしようとしている。

まあ、この国の貴族ではトップクラスの地位に居るし、このパーティーではサンドラ家以上の貴族は居ないし、ただ、同じ爵位を保有している貴族は複数居るみたい（パパン達の会話で聞いた）

それでも、残りは爵位で見ればサンドラ家より格下の貴族である。なので、その貴族達は公爵家の当主に顔を覚えて貰おうという思惑がただ漏れだわ。パパンもママンも、よくあんな笑顔をしながら会話しているよ。

俺だったら、御免被る（ごめんこうむる）よ。

ただ、将来俺もこんな風にパーティー主催したり、参加したりするんだらうなー。

みんな、処世術ばねえ

そっぴや、俺はなにをしているかというと、うちのメイドさんに見

守られながら、貴族の子弟の遊び場にいるよ。

なんでも、昔ながらのしきたり？というか、伝統みたいなもので「貴族であるが故に同年代の子供達と遊ぶ機会がないから、こういう場を設けている。」という話です。

だから、さつき『無礼講』って言ったんだろっな！。

ええ、納得です。ただ、疑問が一つ……いくらなんでも、一歳児には早くね？

そんなことを考えていると、一人の幼女が話し掛けてきた。

「はじめまして！こんばんは！わたしは、セレスって言うの！お友達になって、おねえちゃんと遊ぼう？」

ちよwww逆ナンwww

いや、すまん、ふざけ過ぎた。

まだ、舌足らずの幼女、改めてセレス。だが、なんとなく生前の事故のトラウマもあり拒否感も働いてしまう。

まあ、一歳児だからけどw

とりあえず、返事しないと

「あっ」

と言いながら、首を横に振る。

すると、セレスはぱつと顔を輝かせながら笑顔になった。



「うん！それじゃ、おねえちゃんがご本読んであげるね！」

セレスは、絵本を片手に俺を膝の上に乗せてつ絵本を読みはじめた。

「むかしむかしのことでした。まだ、人が、人ならざる者と戦っていた時代です。そんな時、あるしゅ王国の王族である……………」

「世界はこうして、ゆうしゃさまにまもられたのでした。めでたしめでたし」

「どろろ？面白かった？」

「あつ」

と、言いながら首を横に振る。

「そうか！なら、よかったよ！」

セレスがとても、うれしそうだ。

すると

「セレス、お迎えに来ましたよー」

という声がした。声の主を見ると、両親と声の主である男女が見え

た。  
多分、セレスの両親だろう。

「はあい！ママ！パパ！聞いて！この子と一緒に遊んでいたの！」

俺を抱きしめながら、セレスは言う。  
すると、セレスと俺の両親の四人は微笑みながら

「それはよかったね」

「あらあら、お似合いよ」

「まるで、バルと姉弟みたいだね」

「そうね。よかったわね。バルちゃん！」

と、言っている。

すると、セレスは満更でもないよう

「えへへ！そうでしょー！」

と、照れるように笑っている。

こうして、俺は誕生日パーティーを楽しんでいった。

ちなみに、その絵本のタイトルだが、『アルシュ王国の勇者』と言う。

内容は、昔、この国、というか世界で、人とは異なる者達と戦っていた時代があり、その者達と戦いに終止符を打った者がアルシュ王国の王族で、その話をモチーフにした童話だ。

ただ、ラストにその勇者である王族は、どうなったかは書いてはいない。

だから、勇者がどうなったかは誰も知らないのだった。

### 第3話（後書き）

下記にアンケートあり。

こんな酷い文ですみません（汗）

今回は、セレスちゃんを出しましたw

家名とかは、出しませんでした。爵位とかは次話で明らかにしようかとw

そういえば、アンケートですが、簡単な人物紹介や大陸やアルシユ王国の地図とかを乗せた方がいいですかね？

アンケート内容。

- 1・両方いる。
- 2・人物紹介はあるけど地図はいららない。
- 3・地図はあるけど、人物紹介はいららない。
- 4・両方いららない。
- 5・その他。

締め切りは、2012年1月5日までにします。

ただ、すみませんが運営様が運営するこのサイトの利用方法が未だ良くわからないという恥ずかしい話です（汗）

地図は多分、紙に書いてヤツを写メで撮って、その写メを貼る事になると思っているので、出来れば説明をしていただきたいと思います（汗）。

それでは、また次回！

ばいちっ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0713z/>

---

厨二病患者の基地外的思想

2012年1月1日23時52分発行